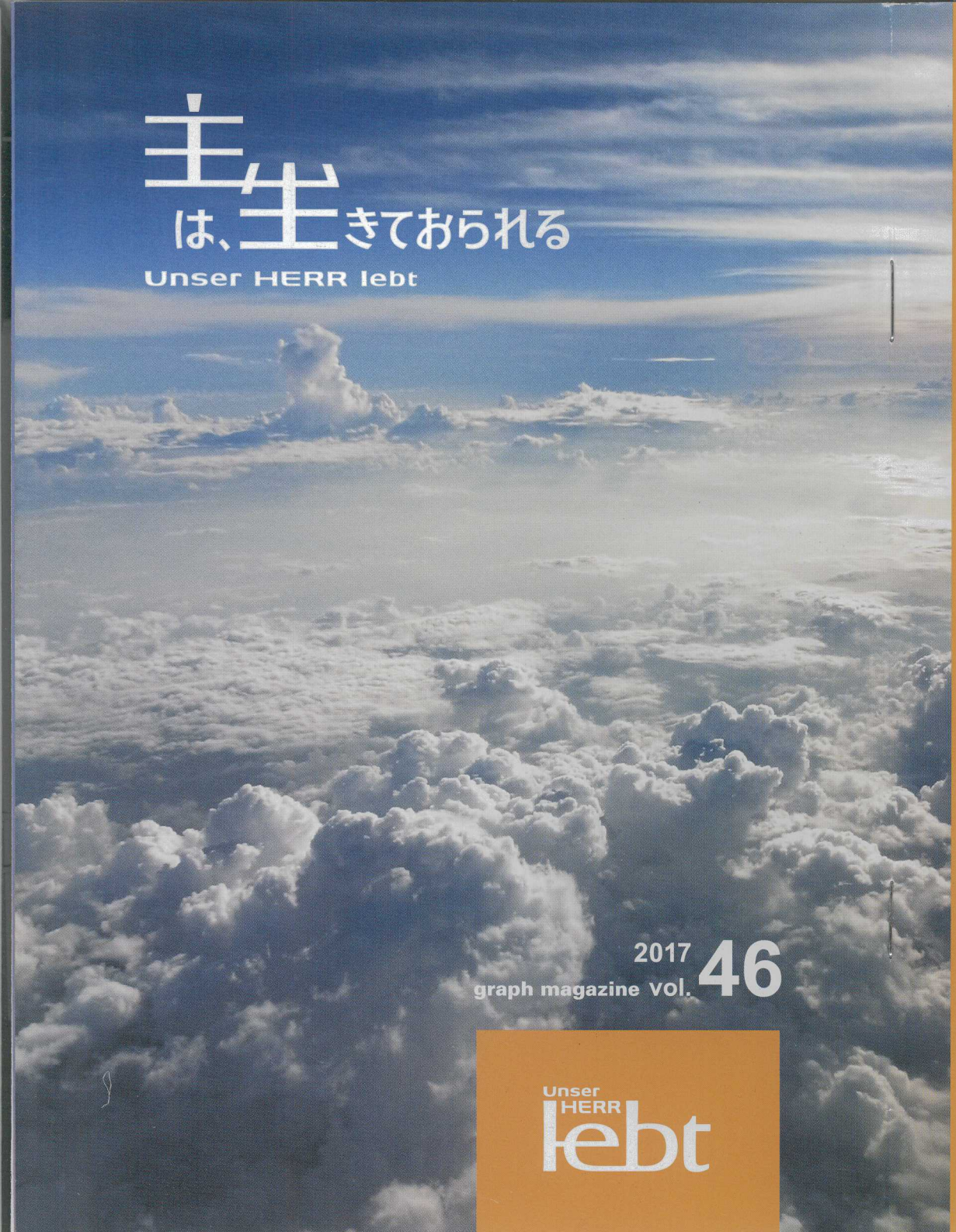
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2017 graph magazine vol. 46

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 46 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt
主は生きておられる

メッセージ

4 神の近くにいることが、しあわせなのです 旭清見

11 主が建てられる教会 宇田川直樹

11人の証し

18 私のようなものを主は愛してくださった 武藤林太郎

21 私がイエス様に出会ったとき 安座間勝枝

27 一つになりなさい 根本稔

34 豊かないのちを求めて 河口智子

41 祈り 竹本礼子

45 みことばのすべてはまことです 内藤文男

52 わたしの恵みはあなたに十分である 内藤淑枝

60 恐れるな。虫けら…わたしはあなたを助ける 児玉尚志

70 父の存在 小池志将

80 すべてを益としてくださる主 鈴木博美

86 イエス様が教えてくれた大切なこと 三浦敬

神の近くにいることが、しあわせなのです

旭　清見

私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。（詩篇　73・28）

ダビデ王の治世に宮廷楽士として主の宮に仕えていたアサフは、詩篇73篇で「神の近くにいることが、私にとってしあわせなのです」と歌いました。

私たちは、いったい何を目標にして生きているのでしょう。一言で言えば「しあわせ」になることではないでしょうか。では「しあわせ」とは何なのでしょうか。この問いに対しては、「聖書」だけに答えがあります。私たちの思い描く「しあわせ」とは何でしょうか。

どうしたら「しあわせ」になるのでしょうか。「しあわせ」の条件とは、何でしょうか。いくつかのことが考えられます。まず一番目は、「物質的に」満たされることだと思います。欲しい物を手に入れれば「しあわせ」になる、と考える人は少なくないのではないでしょうか。

古代イスラエルのソロモン王は、世界一の知恵者として知られていました。彼は、与えられた智恵を用いて商業的に大成功を収め、経済的に非常に満たされました。その富を用いてイスラエル民族の象徴と言える「契約の箱」を納める神殿と壮大な王宮を建設しました。聖書の「伝道者の書」にはソロモンの業績と共に、彼の心情が綴られています。

私は事業を拡張し、邸宅を建て、ぶどう畑を設け、庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。・・・私はまた、銀や金、それに王たちや諸州の宝も集めた。・・・私は、私より先にエルサレムにいただれよりも偉大な者となった。・・・私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。・・・しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

（伝道者　2・4～5、8、9、10、11）

ソロモンはまた、次のように書いています。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。

（詩篇　127・2）

ソロモンは王であり、成功した実業家でしたが、何度となく「むなしい」と告白しています。華やかな外見と比べて、内面は悩んでいるのです。物質的に満たされて、欲しい物がなくなったソロモンの心の内側は「空（から）っぽ」になってしまいました。それで何度も「むなしい」と繰り返しています。

私たちも、ソロモンと同じように成功を目指して努力したとしても、その行き着くところに「むなしさ」が待っているとしたら、どうでしょう。残念なことに、現代社会では、成功を夢見て努力した多くの人が悩み疲れ果てているのではないでしょうか。

神の近くにいることが、しあわせなのです

ソロモンは、人生の後半に一つの結論に行き着いて、それを私たちに伝えてくれました。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。…結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。

（伝道者　12・1、13）

私たちがどれほどの成功を収めても、創造者である神様から離れていたら、むなしさだけで終わってしまいます。でも神様の近くにいる者には、ソロモンが書いたように、神様が「その愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる」、と喜びと平安を約束してくださっています。どちらが「しあわせ」でしょうか。主イエス様はソロモンを例にして語られました。

しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

（マタイ　6・29）

「しあわせ」の条件として二番目に挙げられるものは、私たちの内面、すなわち「心」が満たされることではないでしょうか。例えば、趣味を追求したり、何かを熱心に探究することにより得られる満足です。しかし、何かの研究のために人生の大半を費やすとしても、その行き着くところは果てしがないのではないでしょうか。たとい成功したとしても、そのために払った犠牲は何ものにも代えられないほど大きいものであることも、まれではないでしょう。

新約聖書の手紙のほとんどを書いたパウロという人は、ユダヤ人として先祖伝来の宗教に従って生活してきた人物です。

私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。私はこの道を迫害し、男も女も縛って牢に投じ、死にまでも至らせたのです。

（使徒　22・3～4）

イエス様を知る前のパウロは、ユダヤ教の最も厳格な律法主義に従っていた人でした。当時、彼の心は宗教に捕らえられていました。その結果として、悔やんでも悔やみきれない過ちを犯しました。

心が何によって満たされているかは大問題です。もしパウロのように、心がまことの神様ではなく、人間が作りあげた宗教によって満たされていたら、悲しいことです。そんなパウロはあるとき、主イエス様と出会いました。目に見えない神様がパウロに語りかけたのです。

サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。

（使徒　9・4）

パウロは、もともとはサウロという名前でした。それは彼と同族であった初代のイスラエル王国の王様の名前です。主イエス様と出会った結果、彼は名前を変えました。

しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、…

（使徒　13・9）

主イエス様と同じお方である聖霊に満たされたサウロは、自らを「小さい者」と呼ぶようにしたのです。それまで誇りにしていたと思われる名前を捨てたのです。それだけでなく、彼は高い教養もあらゆる知識も主イエス様の前には役に立たないことを知ったのです。

神の近くにいることが、しあわせなのです

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

（ピリピ　3・8）

彼の心を満たしていた宗教に対する熱心は、彼を「しあわせ」に導くことはできませんでした。その代わりに彼の心を満たした主イエス様によって、彼は喜びに満たされた人になりました。

私は慰めに満たされ、どんな苦しみの中にあっても喜びに満ちあふれています。・・・私はますます喜びにあふれました。・・・今は喜んでいます。

（2コリント　7・4、7、9）

パウロはなぜこれほど喜ぶことができたのでしょう。その答えは、獄中に捕えられていたパウロがピリピの町にいる仲間を励ますために書いた手紙から知ることができます。

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。

（ピリピ　4・4～5）

パウロのそばには主イエス様がいつもいっしょにいたのです。私たちも主イエス様に近づくなら、同じように喜びがあるのです。

パウロと同じような体験をした人に、冒頭に引用したアサフという人がいます。彼は詩篇の作者の一人で、今から約三千年前、中東のイスラエル王国で、当時の王様であるダビデに仕えていた歌を歌う宮廷楽士でした。聖書には次のように記録されています。

ここに、ダビデはレビ人のつかさたちに、彼らの同族の者たちを十弦の琴、立琴、シンバルなどの楽器を使う歌うたいとして立て、喜びの声をあげて歌わせるよう命じた。

（1歴代誌　15・16）

かしらはアサフ、・・・。彼らは十弦の琴や、立琴などの楽器を携え、アサフはシンバルを響かせた。

（1歴代誌　16・5）

アサフは特別な音楽才能の持ち主であり、リーダーでした。おそらく若い頃から忠実にこの務めを果たしてきた、誠実な人物だったと思われます。そんなアサフは詩篇73篇で、自分の心にある感情を正直に明らかにしています。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。

（詩篇　73・21～22）

詩篇73篇には、作者であるアサフの心情が綴られていて、そこには妬（ねた）みや愚かさがあったことを記しています。美しい歌を歌うアサフの心も私たちと同じように苦しみ、驚くことに「獣のようだった」と告白しています。人々の尊敬を受けていたにもかかわらず、彼の心の内側は「しあわせ」とは言えませんでした。

私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。

（詩篇　73・28）

そのようなアサフの手を主イエス様はしっかりと捕まえられました。私たちは近づくだけですが、主イエス様はしっかりと掴（つか）んで離さないのです。しば

神の近くにいることが、しあわせなのです

らくのときが経ってからアサフは、次のように記しました。

神に喜び歌え。ヤコブの神に喜び叫べ。声高らかにほめ歌を歌え。（詩篇　81・1～2）

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。（詩篇　81・10）

アサフの心に喜びが与えられて、その喜びを歌う彼の姿を想像できます。悩み、心の苦しみは、ここには見られません。彼は人生の後半になって単純な結論を見出したのです。それは、「口を大きくあけ」て主イエス様の溢（あふ）れるばかりの恵みを待つことです。これこそ「しあわせ」な姿ではないでしょうか。本当の神様である、主イエス様の近くに来ることだけが「しあわせ」の秘訣です。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。（イザヤ　55・6）

わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです。（ヨハネ　15・11）



旭清見
（吉祥寺集会）

主が建てられる教会

宇田川 直樹

さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。（エペソ　4・1～7）

主イエス様の救いは、極めて個人的なものであり、私たちの人生においてこれしかないという環境とタイミングで、主イエス様が一人ひとりの名を呼んでくださって与えられるものです。

救いを得たことで、私たちは希望のない者から、希望のある者へと変えられました。しかしイエス様は、救われたらおしまいだとは言っていません。イエス様の最終的なご目的は、個人的な救いが完了したことに留まらず、救われるべきすべての魂が、主のみからだにつながり、教会が建て上げられること、そして新しい王国を作り上げることです。

神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。（エペソ　1・22～23）

ここでいう教会とは、目に見える建物とか、人間的に組織された団体を言っているのではありません。主イエス様をかしらとし、主イエス様を信じ受け入れたすべての者が、それに連なる、目に見えない壮大なものです。

御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。（コロサイ　1・18～20）

主イエス様は兄弟姉妹を用いてみからだなる教会を建て上げようとされています。主イエス様はまず一人ひとりに声をかけて救ってくださり、御霊として内に住まわれます。御霊は水たまりのようなものではありません。御霊からは、あふれる泉のようにいのちがとめどなく流れ出します。それと共にイエス様の愛があふれだし、川のように大きな流れとなり、兄弟姉妹を通して限りなくつながっていくのです。私たちキリスト者の一人ひとりは、主をかしらとした教会としてまったく一つとなるのです。

主イエス様は、毎週日曜日に主にある兄弟姉妹が一つ所に集まって、聖餐を受けることにより私たちが、

みからだであり主にあって一つであることを教えてくださいます。

私たちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの者がともに一つのパンを食べるからです。（1コリント　10・16～17）

聖餐を受ける意味の一つは、みからだを象徴する一つのパンが裂かれ、そのパンが主を信じるキリスト者の体に入ることで、私たちは主を頭とするみからだなる教会の一部であり、主にあって一つであることを実感することにあります。

イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。（ヘブル　10・20～22）

主イエス様が二千年前に十字架で血を流されたことによって、私たちの罪は赦されました。そのことによって主イエス様と私たちの間にあった隔ての壁は取り去られ、聖さそのものである主のみからだにつながることが可能となったのです。

私たちの罪が主イエス様の血で贖われたことを今日も覚えるため、一つの杯からともに、ぶどう液を飲むのです。

私たちは主の召しによって集められた者たちです。

主が建てられる教会

私たちは、一人ひとりに主から与えられた、その人にしかできない役割があります。それはかしらとしての主イエス様のみからだにつながる手、足、目、耳のような器官であると聖書は言っています。これもまた驚くべきみことばです。主は、宇宙から見たら微生物ほどにも見えないような私たちを見いだしてくださり、みからだに連なる器官とされている、とおっしゃるのです。

ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。たとい、足が、「私は手ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょう。しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。

そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。また、私

たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。

それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

（1コリント　12・12～27）

この箇所は生きた教会とはどのようなものであるかについて書いてありますが、「キリストもそれと同様です。」とあります。すなわち主イエス様と教会は完全に同一なのです。主イエス様は完全ですから、そのみからだなる教会も完全であるはずです。もし私たち一人ひとりが御霊に満たされ、御霊の一致を保つなら、兄弟姉妹は主とのあるべき関係にあります。主と縦軸がしっかりつながっています。そのようにして主との状態が良好であれば、兄弟姉妹お互いは横軸としてしっかりと結び合されて一つになるのです。そうであるなら、分派、分裂は決して有り得ないと言えます。

生れたままの私たちは自分のことしか考えられないものであり、互いに無関心で、愛がありません。しかし私たちが生きた教会の一部であるとき、兄弟姉妹は御霊の働きによって互いに関心を持ち、互いに愛し合い、ともに喜び、ともに苦しむのです。主にあるキリスト者の群れである教会は、主の絶妙なご計画によって、一人ひとりに大切な役割が与えられ、造り上げられるのです。

ですから他の兄弟姉妹と自分を比較して、役に立たない者だと自己卑下に陥ったり、自分の行動は兄

主が建てられる教会

弟姉妹の妨げにしかならないと落ち込んだりする必要はありません。私たちは不完全な土の器である事実を認め、それを見て嘆くのではなく、器の内側に住まわれる御霊こそが大切なのですから、そこにだけ目を向ける必要があります。

あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4・15～16）

主の建てられる教会は、主を信じる私たちが主をかしらとして完全に結び合されたものです。そのとき、私たちは主の御心と一つになるのです。人間の体の手足などの各器官が、脳からの指示に従わないでバラバラな動きをすることがありえないのと同じです。もし主を中心とした一致がなければ、成長の止まった教会となり、やがては黙示録3章1～3節にあるサルデスの教会のように、死んでいる教会となります。

私たちは、絶えず主にある成長を続けるべきです。そのためには、一人ひとりが主から与えられた賜物を用いて働き、兄弟姉妹がお互いを必要とする群れとなることが必要です。もちろん自分の力でできることではなく、それも主に頼ることによって初めてできるのです。

約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。（ヘブル　10・23～25）

聖書には「愛し合いなさい」と何度も出てきますが、自分にはとても無理だと思ったことがありました。しかし、愛とは主イエス様そのものであり、御霊として私たちに与えられているものです。愛することとは、自分の力で何かをする、というものではありません。愛し合うということは、御霊のみたしの内に、お互いにイエス様をかしらとする者として尊敬し合い、受け入れ、必要とし合うことかもしれません。

私たちは、イエス様にある交わりから離れると不安になり不信仰になります。ですから主にある兄弟姉妹と会い、共に過ごすことを通して、主は生きて働いておられることを証しし合い、間もなく主が迎えに来られる希望を失わないように、励ましあうことはとても大切なことです。

主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。（1テサロニケ　5・10～13）

急速に滅びに向かっている絶望的なこの世で、主イエス様を信じる兄弟姉妹が、主としっかりとつながり、お互いを認めて必要とし合い、励まし合いながら、天の御国に向かってともに歩んで行きたいと思います。



宇田川直樹
（芦屋集会）

主が建てられる教会

私のようなものを主は愛してくださった

武藤　林太郎



左から孫の優（ユウ）さん、林太郎さん、孫の乃安（ノア）さん

クリスチャンになるということは、悪い行いはしない、清く正しい人生を歩んでいかなければいけない、人の悪口は言わない、誰にでも親切にしなければいけないなど、私にはできないことばかりと思っていました。

そんな私に、ベック兄弟は次のように話してくださいました。「イエス様を知るということは、キリスト教に入ることではない。教会の会員になることでもないし、洗礼を受けたり、聖書を理解したり、いい人間になろうと努力したりすることでもありません。イエス様を知るということは、罪の赦しを得ることであり、心の平安また永遠の命を自分のものにすることです」

私は、一九五四年、千葉県で生まれ、現在春日部に住んでいます。

結婚後の生活は、仕事をして給料を運んでいるだけのようなもので、夜も同僚や仕事の付き合いで遅く帰る、そのような生活をしていました。その頃、家内から、もう一緒には生活できないという手紙を受け取りました。そのことで、家内が家を出てしまうのではと、仕事も手につかないほど、毎日が心配でした。

彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。（ローマ　1・28〜31）

その後、家内は、長女が通っていた幼稚園のある春日部福音自由教会で信仰に導かれ、受洗しました。何年か過ぎたころ、家内は春日部キリスト集会へ移りました。

ある日家内から「私は死んだ後天国に行っているけど、おとうさんはどこへ行っているかわからない。心の一致は一生ないね」と言われました。また、キリスト集会に行ってみたら、と言われて行きましたが、最初はいやいや後ろの席でメッセージを聞いていました。ある日のメッセージの中で、「この世には、神様を信じる人と信じない人の二通りしか人はいない。天国に行けるのだから信じる方が得でしょう」ということを聞きました。

その後、軽井沢のバイブルキャンプに行かないかと誘われ、行くことにしました。しかし、イエス様のことを知らない者は、救われることはないのでは、と思っていました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

ベック兄と交わったとき、頭の中が真っ白になり、何

を聞いたのかわかりませんでしたが、いい人間になる必要はない、イエス様があなたのことを愛してくださっている、ということのようだったと思います。

帰りの車の中で、心は喜びでいっぱいになっていました。十年くらい抵抗していたのですが、救われることは本当に簡単なことだったと思い、感謝しました。

わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。

（ヨハネ　12・46）

救われても性格は変わりません、いい人間にもなっていません。ただ、イエス様にあって、兄弟姉妹と一緒にいられることを喜んでいます。

兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。

いつも喜んでいなさい。

絶えず祈りなさい。

すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ　5・14～18）

武藤林太郎
中央工学校建築科卒
（株）セイケイ（鉄鋼メーカー）　定年退職
母　初子（はつこ）
妻　直子（なおこ）
長女　恵美子（えみこ）
長男　元彦（もとひこ）
次女　光歩（みほ）

私がイエス様に出会ったとき

安座間　勝枝



後列右から2番目が勝枝さん、前列中央が弟の徹さん、みなさんと

一九九六年十月、スイスアルプスにあるアレッチ氷河で、私はイエス様に出会いました。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

「氷河を現実に見た！やっぱり神は存在される！」。その瞬間なぜか涙があふれて止まりませんでした。

二十代のころに勤めていた会社の上司だった集会の姉妹から「イエス様の話しを聞いてください」と一九八五年に初めて誘われました。その後もたびたび声をかけていただいたのですが、さらに十年ほどしたころ、ヨーロッパアルプスへ行かないかと誘われました。即ＯＫの返事をし、スイスキャンプへの参加の恵みをいただきました。スイスでは、登山電車でアイガー、ユングフラウ、メンヒなどの世界を代表する山々や大氷河をこの目で見ることができました。そのころの私は登山に夢中で、時間さえあれば時刻表を手に集合場

所の登山口に駆けつける日々を送っていました。

スイスキャンプから帰ってからは価値観が変わり、日曜礼拝、福音集会、ランチタイムの交わりなどの恵みも与えられて、一九九六年十一月の沖縄キャンプで洗礼の恵みに授かりました。

その受洗から六年後の二〇〇二年十二月二日、勤務中に脳出血で倒れ入院、その後のリハビリを経て翌年三月に退院、そして退職しました。それから自主リハビリが続き、約三年間は車の運転もできず、不便な日常生活を過ごしました。これからどのように日々を暮らしていけるものかと思いわずらっていましたが、「うしろのものを忘れ」（ピリピ 3・13）という聖書のみことばに励まされて、右半身まひの状態ながらも車の運転や家事などはできるようになりました。家族は娘と二人、そして近くに母・春子と私より四歳下の長弟・徹が住んでおりました。

六歳下の二番目の弟・勉は長いこと音信不通でした。その間に、勉は離婚から一家離散、自己破産の状態になっていました。そして、購入したマイホームが差し押さえられ、連帯保証人であった私に銀行から通知があり、八年ぶりに勉と連絡が取れました。二〇一〇年八月、千葉県に住んでいた勉を御代田のバイブルキャンプに誘い、ともに参加して、ベック兄とのお交わりが与えられました。御代田キャンプでは「沖縄へ帰ってきてはどうか、寝る所と食べる心配は大丈夫だから」と帰郷を促し、勉は二〇一一年四月に沖縄へ帰ってきて、実家で母と長弟の徹といっしょに暮らすようになりました。沖縄に帰ってからの勉は、御代田キャンプで交わった兄弟姉妹方との再会を喜び、礼拝にも進んで参加しました。仕事もすぐに与えられました。

母・春子は勉が帰ってきてからしばらくは、朝起きたら勉を確認する日々でした。「もうどこにも行くことがないように」と言って、同居をとても喜んでいました。そんな母でしたが、二〇一二年三月、口腔がんを発症し、九十四歳という高齢のため手術が困難でホスピスに入院しました。兄弟姉妹のお見舞いと祈りのなかでアーメンと言って、七月二十三日、徹、勉、その他親戚縁者に見守られて天に召されました。イエス様に感謝です。

弟の勉は仕事も与えられ、やり直そうとした矢先に、会社の集団検診で精密検査の結果食道がんが見つかりました。月に一回、一週間入院してがん治療を行うと担当医の先生から説明がありました。働きながらできるとのことでした。

勉の大好きなみことばです。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ 11・28）

そして言った。「私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」（ヨブ 1・21）

二〇一三年十二月十一日、手術は成功しましたが、勉は麻酔から覚めることなく、多くの医療機器に繋がれたまま、モニターの表示がピーッとなり、兄弟姉妹が見守るなかでの恵みの終末でした。

話は少し前後しますが、長弟の徹も、二〇一三年九月に脳出血で入院していました。治療とリハビリが続き、六か月後の翌年三月に退院し、集会の兄弟が館長を勤める有料老人ホームに入所の恵みが与えられました。しかし徹は、右半身マヒの車いすの生活を受入れがたく、日々悩んでいる様子でした。

その様な徹に、勉の死を伝えられないまま、イエス様に祈る日々でした。実に二年余り、本当のことが言えませんでした。二〇一六年九月十九日、低カリウムにより緊急入院となり、「オレが入院したことは勉

には言わないで」とのこと、「あいつに心配させるな」と兄貴らしいことを言っていました。「イエス様、どの様にしたら最善でしょうか」と祈りの日々でした。

ある姉妹がお見舞いにきてくださり賛美とお祈りをした後に、みことばカードをいただきました。そのみことばが勉の大好きなマタイの福音書11章28節でした。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたし（イエス様）のところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

そのとき「いまだ」と思い、これは「勉の大好きなみことばだったのよ」と、勉の死を伝えることができました。イエス様に感謝です。

二〇一六年十一月十日、主治医から、徹は食欲がなく回復が好くないから、延命治療（経管栄養、胃ろう、ブドウ糖点滴のいずれか）を選択してくださいのことでした。患者本人は、何もしないでくれと言っていました。老人ホームの館長の兄弟は、徹さんの意思に従いましょうと言い、私は「いのちには、人工的な処置は賛成ではない」と話しました。しばらくして、看護師さんから油味噌（沖縄料理の一種）があると食欲が出るようだという話を聞き、主治医に連絡をとり、油味噌の差し入れをさせていただきました。

病院の相談員の方から、そろそろ三か月になるので他の医療施設に転院の件も考えてくださいとの話があり、日々祈りながら情報を集める日が続きました。転院先に医療介護つき老人ホームが与えられ、食欲も出て体重も増えて、いまは入居者の皆さんと同じメニューで毎日を元気で暮らしております。イエス様に感謝です。

姉妹から頂戴したみことばカードの次のみことばに励まされました。

主に愛されている者。彼は安らかに、主のそばに住まい、主はいつまでも彼をかばう。彼が主の肩の間に住むかのように。（申命記　33・12）

娘の奈美のことを少しお話しします。二〇一四年四月十八日の火曜日学び会の席に、突然、総合病院から電話が入りました。急いで行くと、奈美が急性大動脈解離で緊急手術とのこと、十時間はかかるとのことでした。兄弟姉妹がきてくださり、深夜まで待合室で祈ってくださいました。主の愛と優しさがとても心強く、イエス様に感謝です。あれから二年八か月が経過し、二〇一七年一月現在、奈美は職場復帰してイエス様に見守られる日々を過ごしています。日々祈るのみです。

最後に、私のことですが、私はいろんなことに前を向いて歩んでいます。お見舞いに来られた姉妹方からいただいたみことばです。

11人の証し

Unser HERR lebt

そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・3〜5）

ここに愛があるのです。（1ヨハネ　4・10）

私は右半身まひになっても相変わらず登山はやめられず、二〇一五年八月、石川県の白山に八人で登山しました。午後二時ごろ、突然の集中豪雨にあい、気温も三十七〜八度で熱中症注意報がでるほどの悪天候でした。歩行が困難な私たちの様子を見て、下山途中の見知らぬ男性が声をかけてくださいました。いろいろお聞きになられるので、「あなたはドクターですか」と聞きますと、「ドクターではないが林野庁の

職員です。そのままの様子だと明るいうちの下山は難しいと思います」と仰いました。八人の仲間のうち五人は先に下山していました。残った私たち三人の携帯電話は雨にぬれて使用不能の状態でした。すると、その林野庁職員のKさんの判断で「自分の携帯は大丈夫だからレスキュー隊に連絡しましょう」と言って、レスキュー隊の方々を山中の工事車両専用道路に電話で案内してくださり、無事、小松市民病院へ搬送していただきました。午後七時、診察の結果、脳梗塞との診断がくだり、血管注射が五日間、リハビリが三日間の計八日間、はじめての県外での入院生活の恵みでした。退院のその日、娘に迎えにきてもらいました。イエス様に感謝です。

私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。

（ヘブル　12・1〜2）

いろいろなことが起こされましたが、すべてのことが決して偶然ではないと思わされます。私を集会に誘っていただいた姉妹、沖縄集会の兄弟・姉妹はもちろん、ドイツから六十三年前に来日されたベック兄姉に感謝でいっぱいです。本当にありがとうございます。

安座間勝枝（あざまかつえ）

一九四三年　生まれ
一九六二年　前原高校卒
一九七〇年　結婚
一九七一年　娘　奈美（なみ）誕生
二〇〇三年　脳卒中のため退職

一つになりなさい

根本　稔



妻の都さんと

私は、一九四五年二月、茨城県常陸太田市で生まれました。上に、姉と兄がいます。幼いころは、おとなしい、親の言うことをよく聞く、素直な子供だったそうです。地方独特の古いしきたりが堅く守られた所で、両親はそれらの行事をまじめに行っており、私は何の疑問ももたずに育ちました。

高校三年の十二月、家が失火により全焼しました。幸い、近所には燃え移らず、我が家だけで済みました。二階で勉強していた私は、鉛筆一本、下敷き一枚を持って逃げ出すのが精一杯で、大変みじめな思いをしました。近所・親戚・友人など大勢の人たちから、たくさんの温かい援助を受けましたが、元どおりになるまで長い年月がかかりました。このことを通して私の心の中に「負けずぎらい」の性格が芽生えました。「大学はあきらめてほしい」と親に言われましたが、奨学金とアルバイトで何とか学生生活を送ることができました。友人にも恵まれ、苦しい中にも楽

しい四年間でした。社会人になってからも、親に心配をかけないよう、人からうしろ指を指されないよう、がんばってまじめに働きました。

二十六歳のとき、上司から妻を紹介されました。彼女の両親は本当に温かい人たちで、家族みんなで食卓を囲む雰囲気に、この両親の娘さんなら…と結婚を決めました。妻の両親は、私を実の息子同様に信頼してくれ、大変かわいがってくれました。私も、その気持ちを大切に、心から尽くしました。今は、二人とも天国で暮らしていると確信しています。

ところが結婚してみると、二人はまるで「水」と「油」でした。きちんと計画を立ててからでないと前に進まない私にとって、まるで行きあたりばったりのような妻の行動は驚きの連続でした。妻の心ない言葉に何度傷つけられたかわかりません。その反面、本当に明るい性格の持ち主で、この明るさには、ずいぶんと助けられました。当時、会社においては超多忙な毎日でしたが、休日には家族で旅行に行ったり、実家に帰省したりして、楽しく過ごしていました。

しかし、心の奥底にはいつも妻に対する不満がありました。言ったことをやってくれない、子育てについても、こうした方がいい、ああは言わない方がいいという私の忠告をまったく聞き入れない、などなど…。そのうち、言っても無駄とあきらめるようになりました。

娘は高校受験のとき「ピアノをやりたいから音楽科に行きたい」と言いました。住宅の密集地では音の出るピアノは無理、と反対しましたが、妻と娘に押し切られました。するからには三年後には大学受験もあるし、思うぞんぶん弾けるようにと、防音の部屋を増築し、グランドピアノを買い与えました。喜んだのもつかの間、突然娘が苦しみ出しました。

私は、まさか心の病とは思わず、「妻が悪い、妻がこうした」と思い、妻を責めるようになりました。妻は、私のことばの三倍は言い返してきました。毎日毎日、ゴタゴタ続きで疲れはてていた私は、もうこんな家は出て行くしかないと本気で思っていました。そんな中で、妻と娘はボツボツと集会に集うようになりましたが、私には勧めませんでした。

私は、集会には絶対に行かないと決めていました。その意思をはっきりさせようと、自分は毎朝車で出勤するとき、昇ってくる太陽に向かって「どうか由美子の苦しみを取り去ってください」と真剣に拝んでいるから、集会には絶対に行かないと強く言いました。そのとき、いつもは三倍返す妻が一言も言いませんでした。なぜだかわかりませんが、直感的に、このとき初めてイエス様を感じました。

そのころ、娘は短大のピアノ科に通っていましたが、あと少しで卒業というころには、もう通学ができなくなっていました。入院させても、一人暮らしをさせても、旅行に連れ出しても、娘のためと思ってやったことはすべて解決には至りませんでした。あんなに大好きだったピアノもまったく弾けなくなり、ピアノの部屋は物置と化し、そこに私はふとんを敷いて寝ていました。

そのころ、ある方から「ぜひ御主人を御代田の福音センターに」と言われたと、妻が伝えてきました。私は、娘が良くなるならと、娘のために行こうという思いが与えられました。妻に対しては、本気で私に行ってほしいと思っているのか試すために、道がわからないから案内をしてほしいと言いました。車に乗ると目的地までいつも居眠りをしている妻が、そのときは本気で案内してくれて、福音センターにたどり着きました。

玄関ホールにベックさんがおられ、娘が「ベックさーん、お父さんが来ました」と駆け寄りました。「写真を撮りましょう」と言われ、私は、心の中で「この子なんです。この子が苦しんでいるんです」と言いながら、娘をまん中にして並びました。ところが、ベックさ

んはカメラを片手に「お父さんがまん中、中心はお父さん」と言われ、直されました。

いつも子供を中心にしていた妻に、「子供をかまわず、夫をかまうべきだろう」と言っていた私は、「何といいことを言う人だろう。この人の言っていることは本物だ」と感激しました。一九九七年八月のことです。

翌日には、長い時間をかけてベックさんがイエス様のお話をしてくださり、すなおな気持ちで後について祈りました。その翌週から礼拝に集うようになりました。何もわかりませんでしたが、賛美が楽しくて、毎週、礼拝を待ち望むようになりました。

集い始めて間もなく次のみことばが示され、大切にしていた神棚、お札、お守りなどを全部捨てることができました。

その半分は火に燃やし、その半分で肉を食べ、あぶり肉をあぶって満腹する。また、暖まって、『ああ、暖まった。熱くなった。』と言う。その残りで神を造り、自分の偶像とし、それにひれ伏して拝み、それに祈って『私を救ってください。あなたは私の神だから。』と言う。彼らは知りもせず、悟りもしない。彼らの目は固くふさがって見ることもできず、彼らの心もふさがって悟ることもできない。

（イザヤ44・16～18）

翌一九九八年一月二日には、妻と共に受洗の恵みにあずかりました。そのとき、主から次のみことばをいただきました。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

（黙示録　3・20）

受洗後も、さらにこれでもかと言うほど、試練が次々と与えられ、本当に夫婦で一つになって祈らざるをえない状態に追い込まれていきました。今思うと、「一つになりなさい」という主からの恵みと憐れみでしたが、当時は苦しいものでした。

もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ撚りの糸は簡単には切れない。

（伝道者　4・12）

そのころ、たくさんのみことばを主は送り続けてくれましたが、十字架の意味がどうしても私にはわかりませんでした。そんなある日の礼拝のとき、次のみことばに目が釘づけになりました。

神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。

（ルカ　18・11～12）

このパリサイ人と自分が、ちょうど重なりました。「妻が悪い。私は何も間違っていない。真面目に仕事をして、家族を大切にし、何一つ不自由をさせないで守ってきた」。この思いが、イエス様の最も悲しまれる罪であり、私のこの罪のために罪のないお方が十字架にかかって、苦しんで死んでくださったと、はっきりわかり、深く悔い改めることができました。

よみがえられ、今も生きておられるイエス様に、天国の希望もいただくことができました。このころから私自身あまり欲がなくなりました。救われる前は、「定年後にはこうして、その何年後にはああして」と綿密に計画を立てていましたが、今は、「車は走ればいい。家は住めればいい。お金は必要なだけでいい」と思えるようになりました。

11人の証し

Unser HERR lebt

二つのことをあなたにお願いします。私が死ぬないうちに、それをかなえてください。不信実と偽りとを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。私が食べ飽きて、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないために。また、私が貧しくて、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないために。（箴言　30・7～9）

ここに至るまで、言葉に言い表せないほど苦しみましたが、言葉に言い尽くせないほどの恵みもたくさんいただきました。信仰の弱い私に主はたくさんの奇蹟を見せてくださり、ご自身を現わしてくださいました。「妻が悪い、夫が悪い、親が悪い」の渦（うず）の中から、それぞれ自分が悪かったと気付かせてくださった主に、心から感謝します。「祈ったよ。祈っているからね。一緒に祈ろう」という家庭に変えてくださった主に感謝します。

救われて二十年ほどになりますが、今でも、私の本質は何一つ変わっていません。ホッと一息つくと、必ずサタンが入り、自我に支配され、「あの人・この人」「あのこと・このこと」が気になりだし、平安がなくなります。そんなとき、主は、妻と娘の口を通して「お父さん、信仰はどうしたの」、「イエス様が悲しんでおられるよ」と気付かせてくださり、悔い改め、主に立ち返ることができます。

長い間、大勢の方々の祈りに支えられたことは何より心強いことでした。長い間、苦しんだ娘も、皆さんの祈りと見守りの中で少しずつ解放され、仕事が与えられ、希望を持って毎日出かけております。ピアノも以前は、「売ってしまおう、これがあるから娘はよくならない」と変な考えになったこともありましたが、夕食前、妻との賛美のひとときには、伴奏をしてくれて、「イエス様、これで充分です。感謝です」という気持ちでいっぱいです。

救われても、なお思いわずらってしまう私に、「大丈夫、なんとかなる、主が何とかしてくださる」と明るくあっけらかんと言う妻は「ベストパートナー」と思えるようになりました。

最後に、いつも私を勇気づけ、はげまし、支えてくれたみことばを記して終わります。

あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。

疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・28～31）

根本稔
一九四五年　茨城県生まれ
県立太田第一高等学校卒、千葉商科大学卒
妻・都（みやこ）、長男・寛（ひろし）一家、
長女・由美子（ゆみこ）

11人の証し

Unser HERR lebt

豊かないのちを求めて

河口　智子



右から夫の有介さん、智子さん、娘のルツさん、ベックさんと

わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。（ヨハネ　10・10）

主は、生まれる前から私を召し、母の胎内にいる時から私の名を呼ばれた。（イザヤ　49・1）

生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。（詩篇　22・10）

私の父、私の母が、私を見捨てるときは、主が私を取り上げてくださる。（詩篇　27・10）

私はささやかな幸せを求めていましたが、「主」は豊かないのちを与えてくださいました。

わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。（ヘブル　13・5）

このみことばは、私の不安定な心を守ってくださいました。

私は終戦の翌年、父の第一子として長崎で生まれました。三歳の頃父が亡くなり、父の実家の天草に預けられ、その後は母のおばの許に預けられ、長崎の五島で育ちました。そんな私は、がまんすること、がんばることが、生きていくうえでプラスになる、と学んでいったようです。

日曜学校に導かれ、聖書のみことばに出会いました。自分の罪のことも、主の十字架のこともよく分からないまま洗礼を受けました。教会に行っていましたが、クリスチャンはこうあるべきと自分で自分を縛り、窮屈（きゅうくつ）になっていました。

就職して社会に出たとき、何か自由がありそうな気がして、しだいに教会から離れていきましたが、失恋という問題を通して、イエス様は私を教会に戻してくださいました。戻ることに敷居が高く、人に何と思われるだろうと思いましたが、何と思われてもいい、これからの人生をイエス様にかけてみようと思いました。教会に戻ったとき、伝道者の兄弟から次のみことばをいただきました。

「さあ、来たれ。論じ合おう。」と主は仰せられる。「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」（イザヤ　1・18）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。私は神の恵みを無

にはしません。（ガラテヤ　2・20～21）

私は罪を赦されている。これからはイエス様と共に歩みたい。だからがんばらなくっちゃと思ってしまいました。私は自分のことが何も分かっていませんでした。みことばを守ることができないことも、自分の内に良いものは一つもないということも。

わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。（ヨハネ　10・10）

何も分かりませんでしたが、私もこの豊かないのちがほしいですと祈りました。また、コロサイ書1章27節の「この奥義とは、あなたがたの中におられるキリスト、栄光の望みのことです。」というみことばに触れたとき、「エッ、私の中にイエス様が住んでおられるのですか?よく分かりません」と祈りました。聖書を読み進むうちに、神さまの求めておられることは非常に高くて私にはできない、とても無理と思い、またも私はイエス様の許から逃げようと考えました。そのとき、次のみことばが与えられました。

あなたがたは、なおもどこを打たれようというのか。反逆に反逆を重ねて。頭は残すところなく病にかかり、心臓もすっかり弱り果てている。足の裏から頭まで、健全なところはなく、傷と、打ち傷と、打たれた生傷。絞り出してももらえず、包んでももらえず、油で和らげてももらえない。（イザヤ　1・5～6）

私は苦しみの中で動けずにいました。結婚、そして子供が与えられ、日曜日は教会へという日が続いていました。私の母のことを通して私たち夫婦に問題が与えられました。イエス様は問題を通して、私の内側を照らしはじめられました。主人は母の問題に耐えられず、仕事に行けなくなり、仕事をやめました。主人とは対等にものを言うとか、けんかができるような状態ではありませんでした。私も子供たちも息をひそめて生活し、主人が仕事から帰るのが恐ろしい毎日でした。そんな中、私は、教会に行くこともできなくなりました。自分ではイエス様を信じていると思っていましたが、問題が起こったことにより、そうではないことが明らかになりました。頭の中では知っているつもりでしたが、イエス様のことは何も分からず、信頼することもまったく分かりませんでした。

そんなとき、吉祥寺集会のある姉妹が宮崎県の綾（あや）のキャンプに誘っていただき、私は子供たちといっしょに参加しました。一九九〇年のことです。それから集会に集い始めました。

半年ほど、イエス様はゆりかごのように私を包んでくださいましたが、それから主の訓練が始まりました。メッセージでは委ねなさいと言われます。「私も委ねたいのです。でも、委ね方が分かりません」と、叫んでいました。あるキャンプのとき、ベック兄から、「委ねるお方がどんなお方か、分かっていたら委ねられるよ」と聞いて、ハッとしました。私はイエス様のことを何も知らないのだと示されました。主は忍耐をもって私を取り扱ってくださり、成長させてくださいます。

母の葬儀は集会で行われたのですが、その葬儀で私は主をほめたたえることができました。このことを通して、主の約束のみことばをかたく握（にぎ）ることを教えられました。母の晩年は、アルツハイマー病、両足の大腿骨骨折、片足の切断、ガンという日々でしたが、いつも母の口から出てくる言葉は、「ありがとう」でした。そんな母の姿に、主人も母を許してくれるようになりました。

イエス様は次々と問題を与えられ、私の中の奥深くにある私の罪にも光が当てられるようになりました。私の罪は深く隠され、がまん、がんばりで何層に

も塗り固められ、それはとても強固なものでした。
私は高校生のとき、日曜学校の先生だった姉妹に、「私は少々のことではへこたれません」と言ったのを何十年もたった今になって、改めて思い出しました。

忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。
（マタイ　23・27〜28）

苦しみの中でもクリスチャンとして、いい妻、いい母であろうとしてがんばっていました。もうダメ、がまんできない、がんばれないというところまでがんばりました。家庭は崩壊寸前でした。
御代田での交わりのとき、主人のこと祈ってくださいとお願いしたら、「エッ誰のこと?」と言われ、主人のことですと言ったら、「エッ誰のこと?」と二回言われ、そのときハッとしました。問題は、自分を正しいとして主人をさばいている私だと気付かされました。私の中のがまんと、がんばりが崩（くず）れていくのを感じました。私の何層にも塗り固められた強固ながんばりは、自分でもできないことを主人や子供たちに押し付けていたのです。「ごめんなさい」しかありませんでした。
一つひとつの問題を通して、主は御自身を現わして、主に信頼すること、委ねることを教えてくださいました。悩みや苦しみがなければ、これほどまでに主を求めなかったと思います。
イエス様が十字架で死なれたとき、私も死んでいると、メッセージで聞きましたが、私にはよく分かりませんでした。主にあって死んでいると言われても、「私はここに生きている。死んだと言われても死んだ気がしない。私は分からない」と叫んでいました。こういう状態が続いていたとき、フッと、私が不信仰なだけじゃないかと思わされました。

父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。
（ヨハネ　3・35）

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
（コロサイ　3・3）

キリストが死んだとき、私も主とともに死んだ、と神は見ておられることを気付かせてくださいました。主は私に信じることを求めておられたのです。
私は御霊に導かれて歩みたいと思いました。しかし、どうしたらそのような歩みができるのだろう。これはとてもむずかしい、何か特別のことのように思われました。そのようなとき、メッセージの中で、「主よ。どうしたらいいか分かりません。助けてください。あなたに従いたいです。導いてください」と祈る人はもう御霊に導かれている、と聞きました。ああ、それなら、私もこの祈りをしている、私は御霊に導かれている、と楽になりました。頭の知識で主のことをいつもむずかしくしていました。

私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。
（ヨブ　42・5）

私はやっと「主」にお会いしました。聖書を読むことがうれしくなりました。みことばはいろんなことを語ってくださいます。いつも主に語り、主に信頼して、ホッコリしています。
私が自分の力でがまんする、がんばることをやめて主を見上げて楽になったら、一人の姉妹から「ご主人も楽しそうにしているね」と言われました。今は主

人と二人、車であちこちのキャンプや集会に行かせてもらっています。感謝です。

私がほしかった豊かないのちは、「主」が私に与えたかったものでした。豊かないのちはイエス様との生きた交わりだと思います。主は神の国にふさわしい者とするため、私の中で主がすべてのすべてとなるため私を導いてくださいます。

ベック兄がメッセージで語っておられたように、「主よ。私は自分に絶望しています。あなた様の御心にかなうことを自分からは何もすることができません。どうぞあなた様が私を通して御自身の御心をなしてください」と祈っています。

私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。
私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。
（詩篇　27・4）

「神にとって不可能なことは一つもありません。」マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」
（ルカ　1・37〜38）

きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
（ルカ　2・11）

河口智子
一九四六年長崎で生まれる
福岡市立田島小学校、同友泉中学校、同福岡女子高等学校卒
（株）富士設計コンサルタント、箱崎伝道館（キリスト教書籍販売）、福岡クリスチャンフィルムセンター
一九七五年結婚
夫・河口有介、一男二女

祈り

竹本　礼子


後列右が礼子さん、前列左から長女の真理さん、夫の真夫さん、ベック兄姉と

「証しというのは身の上話でなく、イエス・キリストとのかかわりを話すことである」。これは四年前、多くのことを言いっぱなしで天国へ召された夫が、口にしていた言葉です。

その言葉に沿えるかどうか、わかりませんが、主イエス・キリストと私のかかわり、加えて私の家族とのかかわり、を書きたいと思います。

初めに父、誠一から聞いた祖父のことをお話しします と、祖父の竹本広は今から九十年近く前、イエス様に出会ったようです。ご近所に住むクリスチャンの家を訪れる度に、何とも言えない、春のようにさわやかで、清々しい気持ちを感じて、クリスチャンとはいいものだと思ったそうです。そして病気になり、療養中の身を海辺の砂浜に置いたとき、「万物を造られたのは、創造主である」と突然、感動と賛美の心がわき起こったそうです。こうして当時「ヤソ」と呼ばれていたキリスト信者となった祖父は、教会に行き、主を

礼拝し、聖書と内村鑑三さんのたくさんのメッセージ本を読み、イエス・キリストを伝えるために、自宅で集会をし、田舎のまた田舎へ、自転車を走らせた、ということです。

その孫に嫁いだ私は、熱心な仏教徒の家庭で育った者でしたが、独り生活を始めた学生時代には、心の拠り所として、日曜日に教会に通っていました。四年後、京都から東京に居を移しても、高校時代にクリスチャンのいとこからもらった聖書を持って、独り生活をしていました。東京での生活が五年余り過ぎようとするある日、機会があって、初めて国立（くにたち）の池田家（夫の一番上の姉夫婦）へ行った玄関先で、開口一番、池田康姉さんが、「まあ、礼子さんいらっしゃい。私、祈っていたのよ」と、歓迎してくれました。「祈る」、しかも人のために祈ることに　とても驚きました。

その一年後、高知へ帰り、結婚をして、日曜日は教会へ行く生活が続いていましたが、十年ぐらいして、東京の三人の義姉たちから相前後して、リンデ姉の「実を結ぶ命」のテープが届けられました。忙しい日常生活の中、三人の子供たちが寝た後、夫と二人で何度も何度もそのテープを聞きました。病床にありながら多くの人たちのために祈り、導き、喜んで天国へ召されたリンデ姉の生きた信仰のお証しでした。「主イエス様は生きていらっしゃる。そして生きて働いてくださっている」、そのとき、私ははっきりと知ることができました。それ以来、聖書と共に、「実を結ぶ命」の本が、この世の種々な事々に出会うたび、私をイエス様のもとに引きもどしてくれました。

今から三十年余り前、土佐山田の家が新築中で、お隣の離れ家をお借りしていましたが、私たちの考えを超えて、いつの間にかその借り家で、家族五人の日曜礼拝をもつようになっていました。一番最初の礼拝は、建設中の居間の床に新聞紙を敷いての礼拝とベック兄の福音メッセージでした。聖餐（せいさん）のパンが、割ってみるとチーズが入っていたのも、とても懐かしい思い出です。最初のころは、男性の信者は夫だけでしたから、一人で祈りと司会をし、メッセージは東京から送られてくるテープを聞いていました。ときには、五人ともぐっすり寝てしまい、いつの間にかテープが終わっていたこともありました。当時は、ベック兄姉と東京の義兄姉たちが、月に一回高知に来てくださり、土曜日はベック姉のケーキの会、日曜日は礼拝とベック兄の福音メッセージでした。家族だけの集会には、やがて一人の姉妹が参加し、それから一人ずつ二人ずつ、いろいろな導かれ方で集うようになりました。

つたない日々の祈りに、主イエス様が生きて働いてくださることを実感する毎日でした。最初は、夫を支えて一生懸命しなくては、と自分に言い聞かせておりましたが、とても私には無理なことで、次第にパワーダウンして長く続きません。喜びや感謝よりも、つぶやきが口から出るようになりました。そのようなとき、道しるべとなったのが聖書のみことばと、「実を結ぶ命」のリンデ姉の信仰の姿勢でした。主が計画して立ててくださった集会だから、祈って、あとはおゆだねすればいい、いいように導いてくださるという思いが起こされ、心身とも元気にしてくださいました。現在は、土佐山田の隣り町、野市町土居の集会で、兄弟姉妹たちと礼拝を守っております。

集会に集い始めて三十年余りを振り返ってみますと、いろいろなことが起き、心惑わされ、ときに自分の考えでつき進んで、その結果、自分の傲慢な心に気づかされ、主イエス様にごめんなさいと祈りの中であやまることの多い日々でしたが、平安なときもたくさんいただきました。特にこの数年間、何事が起こっても、心に平安があります。聖書の中に、「わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。」（ヨハネ 14・27）とありますが、まさに、その通りです。

また、聖書の中の「詩篇」に、次のみことばがあります。

主は、私の光、私の救い。
主は、私のいのちのとりで。
たとい、戦いが私に向かって起こっても、
それにも、私は動じない。　（詩篇　27・1、3）

このみことばは、私に慰めと平安を与えてくれます。すでに天に召された夫が、療養中に「天国で待っているからね」と言い残してくれた言葉を心に置き、イエス様が呼んでくださったら、「はい、私はここにおります」と心に備えをしています。そのときまで、集会の兄弟姉妹たちと共に祈り合い、主を賛美して、イエス様のことをまだ知らない方々に、少しでも伝えることができますように、主の御用を喜んでできますように、また心和ませてくれる可愛い四人の孫たちが、イエス様大好きな子供として成長しますようにと日々祈りながら生活をしています。私たち家族が信仰を持ち続けられますように、三人の子供たち、そしてその家族と共に礼拝を守り、イエス様を中心とする生活ができますように、また祖父広兄の祈りが実を結びますように、と切に祈る毎日です。

竹本礼子（たけもと　れいこ）
長女　真理（まり）
長男　真一郎（しんいちろう）　妻　加奈子（かなこ）
孫　愛奈（あいな）　幸太郎（こうたろう）　幸奈（ゆきな）　真仁（まさひと）
次女　林　直子（はやし　なおこ）　次女の夫　欣寛（よしひろ）

みことばのすべてはまことです

内藤　文男



左が文男さん、右が妻の淑枝さん、みなさんと

生い立ち

私が二歳の時、生母は結核で亡くなり、その後、私は父の姉妹たちの家庭に預けられたようです。したがって、生母に関する思い出はまったくありません。

四歳の時、父が再婚し、一家は父の勤務地の茨城県日立市で暮らすようになりました。一九四四年秋、父ひとりを日立に残し、育ての母の実家があった岡山県御津郡建部村に疎開しました。

一家は一九四六年五月、日立に戻りました。前後して、妹と弟が生まれました。厳しい食糧難のさ中、父は社宅の焼け跡を開墾し、いろいろな野菜を作って一家の飢えをしのいでくれました。母も幼い二人の育児と家計のやり繰りに苦労していたようです。

母と私に血の繋がりがない事実を知ったのは、大学四年の秋、就職手続きのために戸籍謄本を取り寄せた時でした。私は、細心の注意を払って私を育ててくれた両親に改めて感謝しました。

大学四年の秋、ひとりの可愛らしい女性に出会いました。従兄の奥さんの妹で、四年半ほどの交際を経て結婚し、現在に至っています。

本来、幼少の折にこの世を去っていたとしてもまったくおかしくないような私が、七十八歳の今日まで本当に恵まれた人生を送らせていただいたのは、主の憐れみ以外の何ものでもないと、つくづく思わされています。

サラリーマン生活のスタート

一九六一年に大学を卒業し、当時日本でも盛んになりつつあった石油化学の仕事に従事したいと考えて、三菱化成工業(株)に入社、一九六三年暮に念願かなって、建設途上の倉敷市の水島工場に転勤しました。

水島の石油化学工場は一九六四年に操業を開始しましたが、そのさ中に、父が胃癌でこの世を去りました。私にとって、職場の上司や同僚の理解と支援を受けて、父が亡くなる前の約二ヶ月間、土曜日の夜行列車で父が入院する東京の病院へと向かい、翌日曜日の夜行で倉敷に戻るという生活を続けることができたのがせめての慰めでした。翌一九六五年、私たちは結婚し、倉敷市に住むことになりました。

妻の入院

一九六九年春、妻がスモン病と診断され、岡山大学病院(以下、「岡大病院」)に入院しました。私と娘は、家内の実家の世話になることとなり、妻の母親が全面的に娘の面倒をみてくれました。私自身は、妻の実家から片道一時間のバス通勤をして、工場の建設プロジェクトに没頭しておりました。妻の高額な入院費は、妻の実家に全面的にバックアップしていただいておりました。

妻の弟が岡山大学医学部耳鼻咽喉科の医局に勤めていましたので、ほとんど毎日、妻の様子を報告してくれました。後述しますように、岡大病院の治療方針が根本的に間違っていたため、妻の病状はどんどん悪化し、ついには歩行ができなくなりました。私は毎日、暗たんたる思いでした。一方娘は、妻の弟や妹にも可愛がってもらい、ひねくれもせず素直に育ったことは不幸中の幸いでした。スモン病の原因が整腸剤キノホルムと判ってからも、岡山大学はウイルス説に固執してキノホルムの投与を続けていたため、妻の病状はますます悪化して行きました。私たちは岡大病院に見切りをつけ、妻は倉敷中央病院に転院しました。

転院する際には車椅子生活でしたが、やがて、松葉杖で何とか歩けるようになり、一九七一年の終わりごろ、ようやく退院することができました。

イエス様との出会い

一九七三年秋オイルショックが起こり、その影響は石油化学業界にも現われ、三菱化成も急速に業績が落ち込んで、設備投資どころではなくなりました。そこで、建設要員の半分を別会社として分離し、外部顧客のエンジニアリングの仕事をするように、との社の基本方針が出されました。私は新会社への出向を志願し、建設業の世界に飛び込むことになりました。そして、しばらく経った一九八五年四月、東京本社へ転勤を命じられました。

転勤を命じられる一～二ヶ月前、妻が倉敷に来られたベック宣教師(以下、「ベック兄」)に初めてお目にかかり、「あなたのご主人は救われていますか?」と問われて、これではいけないと気付き、急いで私と娘をベック兄に会わせました。ベック兄は私たち親子と交わってくださり、聖書のお話をじっくりとしてくださいましたが、申し訳のないことに、私はその内容をまったく憶えておらず、ただ、「空しくありませんか?」との問いかけに対し、「全然空しくありません」とお答えしたことだけを憶えています。

同年四月、家族は大宮市に転居し、妻は早速、吉祥寺集会へと喜び勇んで集うようになりました。そ

して、私を吉祥寺での礼拝、荻窪の重田兄姉宅での家庭集会、また、軽井沢でのバイブル・キャンプへと熱心に誘いました。私はあまり気が進まなかったものの、家庭サービスのつもりで時々付き合っていました。

聖書を読むようにとすすめられましたが、マタイの福音書全章をやっとの思いで読んで、あまりの荒唐無稽な内容に呆れてしまい。それ以上は到底読む気になれませんでした。ところが、一九八六年七月の軽井沢バイブル・キャンプでベック兄がメッセージで引用された次のみことばが、初めて私の心に入ってきました。

十字架にかけられていた犯罪人のひとりはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」

イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

（ルカ　23・39～43）

私には罪の意識が常に心の片隅にありましたが、一生懸命働いて家族を養うことにより、何とか自分の罪が帳消しにできるのではないか、という淡い期待がありました。けれども、このみことばに接した時、私は、自分を十字架上で回心した犯罪人と比べる思いに導かれました。そして、このみことばが私の信仰の原点になりました。私が四十七歳の時でした。

その前日から重田兄姉の別荘に泊めていただき、いろいろとお交わりいただいたことも、本当に感謝でした。

翌八月には、妻とともに、四十人ほどの兄弟姉妹たちと一緒に、ベック兄により水のバプテスマを授けていただきました。当時浦和市に住んでいた母も立ち会ってくれました。この母が九十三歳で召された時、私の聖書朗読と祈りによる葬儀をさせていただいたのは、母に対するせめてもの恩返しになったと感謝しています。

さて、信仰が与えられたものの、相変わらず私はこの世にどっぷりと浸かっていました。ある同僚は、「内藤さん。イエス・キリストを信じるようになったそうだけど、全然変わっていないね」と言うし、母は、「信者になったら変わると聞いていたけれど、淑枝さんに親切になっただけじゃないか」と妻に言ったそうです。確かに外見上はほとんど何の変化もなかったに違いありません。

しかし、内面的には完全に新しく生まれたと思っています。イエス様に出会う前は、聖書のみことばが何とも荒唐無稽で、到底読む気にもなれなかった私が、気が付くと、みことばには理解できないことが山ほどあるものの、間違っているとか、嘘であるとか思うことが不思議なことにまったくなくなっていたのです。

みことばのすべてはまことです。　（詩篇　119・160）

詩篇のこのみことばそのものは、イエス様と出会ってからずっと後になって与えられましたが、自分の意識としては、短期間のうちにこうなっていたわけです。これこそが、私にとって何よりの新生の証しであると思っています。

イエス様に出会う前は、死とは自分にとって四次元の世界が終了することであり、自分にとってはすべての終了を意味すると、ずっと思っていました。けれども、イエス様に出会ってからは、天の御国の存在を知っただけではなく、天の御国に招かれるには、「自分が信仰の薄い者であることを自覚して、主の御前にへりくだりさえすれば良い」ということをルカの福音書12章22～32節のみことばによりはっきりと示されました。これも聖霊が働いてくださった賜物と感謝しています。

真理はあなたがたを自由にします

もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。

（ヨハネ　8・31～32）

ヨハネの福音書14章6節のみことばのとおり、真理とはイエス様ご自身です。イエス様は「ご自身のみことばにとどまる人は救われ、その人を自由にしてくださる」と言われました。

イエス様が十字架の御業（みわざ）を通してなしてくださったのは、律法の束縛からの解放であり、罪の奴隷の身からの解放であり、本質的には、「自我という肉の束縛からの解放」です。

ところが、この世で叫ばれている「自由」、私自身が若い頃からその信奉者であった「自由」とは、本質的に「自我の解放」であり、その最たる姿が「自己実現」です。

従って、イエス様の言われている「自由」と、この世で叫ばれている「自由」とは、まったく異なったことを意味しています。

現在の世界は、「自我の解放」の典型とも言える自由競争が行き過ぎた結果、市場原理主義があまねく支配し、本来私有財産制度を否定していたはずの一党独裁の大国をも巻き込んで、貧富の格差がどんどん拡大し、世界は政情不安の一途をたどっています。これは、キリスト教国を自認している欧米先進国ですら、イエス様が言われている「自由にする」の意味をはき違えている結果に他ならないと思います。

私は学生時代に亡き父から手ほどきを受けたゴルフに長年凝り、救われてから後も依然として多くの時間とお金をこれに費やしていましたが、十年余り前、ヨハネの福音書8章31～32節のみことばを改めて示されました。その結果、ゴルフに血道を上げることは自己実現に他ならず、「真理はあなたを自由にします。」のみことばのはき違えであると気付かされ、自分にとって自己実現のかたまりであったゴルフから解放されました。それ以降、クラブを握ったことは一度もありません。

終わりに

それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

（ローマ　6・3～4、6）

主は私を憐れんでくださり、私の古い人がイエス様とともに十字架につけられて、すでに葬られている、としてくださっています。

これからは、スモン病でずっと苦しんできた妻を少しでも助けながら、新しく生まれた者として、残された日々をともに歩んで参りたいと存じます。

内藤文男（ないとう　ふみお）
一九三九年生まれ　茨城県日立市出身
東京都立戸山高校卒／東京大学工学部応用物理学科卒
三菱化成工業（現三菱化学）及び関連会社勤務／二〇〇一年　退職
妻：淑枝（よしえ）
長女：中村佐知子（なかむら　さちこ）
長女の夫：中村浩一郎（なかむら　こういちろう）